
黒チル日記

かるびん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒チル日記

【Nコード】

N0722G

【作者名】

かるびん

【あらすじ】

強制隠居生活のサブキャラクターのチルが主人公のお話。「女ってねいろんな顔を持つてるの。」可愛い顔を隠れみのにして、やりたい放題やっています。

第1話 私の欲しいもの（前書き）

チルの印象が変わってしまつので、かわいいチルが好きな方は読まないことをオススメします。

第1話 私の欲しいもの

世の中には、恵まれた人がいる。たとえば私。

家は大きなカルア農園経営。堅実に暮らしているから、けっこうな資産家だ。

兄弟は6人で、10歳離れた五つ子の兄。そして私は末っ子で女。甘やかされ放題だ。

兄たちはかっこいいし、私もかわいい系でイケている。容姿っていうのは、使える。

いたずらをしてうるんだ目をして唇を噛みしめ、上目遣いでぶるぶる震えれば完璧。無罪放免だ。

私は頭も良かったので、すぐマスターして、両親・兄たちを翻弄してやった。

もちろん、いたずらばかりしていたらバレてしまうから、ここぞという時だけに使ったけどね。

さすがに、兄たちは私がただ可愛い子じゃないって薄々気が付いていたみたいけど。

私があんまり愛らしかったから両親は、私の将来に野望を持った。カルア園は立派だったけど王室御用達の農園ではなかったから、私を使ってそれを手に入れようとしたの。

ちようど王家に同じ年の姫君がいたから、彼女が入った花嫁学校に裏口入学させたのだ。

まだ、学生だった兄たちに農園をまかせて、三人で王都に移り住んだ。

学校は、退屈でしかたがなかった。

ただ、しっかりマナーを身につけて先生のお気に入りでいたほうが、いろいろやりやすかったから、成績はトップクラスを保ったけど。そこでトップだったのは、メルリル姫。

王族のツテがあれば、さらにもしろいことができる。

私は彼女を観察し、どう攻めようかと、取り巻きの力関係を計^{はか}っていたら、彼女が気づいた。

彼女も同じ穴の貉^{むじな}だったって訳。

とたん、学校が楽しくなった。

あつというまに、悪友になった。先生の秘密を探り出したり、学校の七不思議を増やしたり減らしたり。

給食が支払った値段に見合わない気がしたので、調査して不正を暴^{あば}いたり。

いい子の仮面の下で、法に触れるようなこともした。

いいこともたつぷりしたけどね。

おもしろいから・したかったからで、自分の喜びのためにしたんだけど、けっこう感謝されたはず。

本当に楽しかったけど、両親が私の嫁ぎ先を物色^{ぶっしょく}し出したので終わらせることにした。

いわれるがまま嫁いだら、ひどい目にあう。

舅・姑・小姑に仕切られた家に奴隷奉公なんて冗談じゃない。

辛かったけど食事を減らして、見る間にガリガリの不健康体になった。

育ち盛りで身長が伸びていたからより哀れに見えた。

いまにも死にそうな姿になった娘に、両親は医者を頼った。

狙^{ねら}い通り、転地療養を勧められて生家に戻ることに成功した。

あの子は体が弱いつて噂のおかげで、結婚話も流れたし言うことなしの結末だった。

今回は逃れたけど、次はどうなるか。

私はカルア農園を継ぐ決意をした。

兄たちは農園で働くことは長^たけていても経営はイマイチだったから、すぐ賛成してくれた。

婿をもらえばいいよって。

王都のメルリルとは、文通友達でいろんな噂を仕入れては交換し合

っている。

噂のウラを取ってみると陰謀がかくれていたりして楽しいのだ。

オーレスに戻って、まずしたことは、メルリルの半分でもいいから面白い子を探すこと。

そして見つけたのが渡辺ランだった。

家は小さいながら流行っている食堂で、小金持ち。天才の兄がひとり。（ただし、変態。）

もと、隠密長のおじ。（食堂の壁の情報コーナーの情報があまりにも正確なので探ってみたんだけど私には分からなかったので、メルリルから教えてもらった。探っていたのはすっかりバれてしまい、きつちり落とし前をつけさせられた。怒らせると怖い人。）

両親はウチと同じくふつう。

元気な、箒が大好きな普通の子。

なにかは分からないけど、惹きつけられるものを持っていた。

4歳で王都にいったから、その前に会ったことがあるのかと記憶を探ったけれど覚えていなかった。

王都に行ったからメルリルにも会えたし、将来設計も出来たけど、休暇に帰って来るべきだったと後悔した。

ランには幼馴染の子がいて、彼女を独占していたからだ。

時々でも帰省していたら、ミミコの座にいるのは私だったはずだ。オーレス学校に入学するまでに、ミミコを排除しなければ。

さあ、ミミコ、覚悟してね。不相応な椅子に座っているあんたが悪い。

第2話　ねらい目

まずは、敵を知らなければね。

ランとミミコが一緒にいる所を観察していて気が付いた。

楽しげに笑いあっているも、ランの目は通り過ぎる箒を追っているし、ミミコは男の子に興味ありげな視線を送っている。幼馴染だから、なんとなく一緒にいるってことだ。

あたしはメルリルという時、気を逸らしたことなんかない。あたしと彼女は互いを選んで親友になったからだ。

同じものを見て、違う考え方をしても、お互いの違いを楽しんでいた。

さて、ニセモノの友情をきっぱり終わらせるにはどうしようか。二度とミミコが復活してこないように、トドメを刺さないで。

ミミコの家は雑貨屋だ。

他にもある店との際立った違いは、オーレス城と特殊な契約をしていることだ。不正とワイロの臭いがプンプンした。

帳簿も二重帳簿になっていたし、ワイロも確認できた。

ミミコの母親は、納入業者と軍人の愛人がいて、旦那もつつす感づいているけど、婿養子なのでしらんぷりしていた。

けれど、これでは使えない。破産させても、ランはミミコを見捨てないだろう。

ミミコを攻めるより、ランの方向から攻めてみようかな。

ランの兄サンサを使うのがいいかも。

ミミコの初恋の男。ミミコがのどから手が出るくらい欲しがっている男。

でもサンサが、愛しているのはランだ。

ミミコの倫理観は、これを受け入れないだろう。

サンサに対する嫌悪感はランにも向く。

不条理に責めるミミコにランの気持ちも離れるはずだ。

あたしが、ランの親友になるなら、ここがチャンスだ。

第3話 撃つ

ねらいが決まったら、後は撃つのみ。

二人一組の所に混ざり、三人一組が自然になつてきたところで、ミミコがサンサに疑惑を持つように仕向けた。

少しずつ雨が石を穿つように、ミミコの心が疑惑に囚われていくのがわかった。

もう、何を見ても疑わしく、汚らしいと感じているらしい。汚れてもいないのに、よく手を洗うようになった。

コップのふちまでたまつた疑惑。表面張力ギリギリで、あふれるその時を待っていた。

もちろんあたしは最初のうちに手を退いて、ミミコ自身でサンサの気持ちに気づいた形になるようにした。

もう、いつ引き金がかけてもおかしくなかった。

だからあたしは、その時にランの味方ができるように側にいた。きっかけは、なんでもないことだった。

サンサがミミコに会ったとき、ランはどうしたと聞いたらしい。

瀬戸際にいたミミコが爆発。サンサに積年の想いを告白して、自分を選ぶように詰め寄つたという。

もちろんサンサは断った。

断るのはランのせいかと、汚い、と詰るミミコに、サンサが「過去も未来も、ランだけを愛している」と言つたらしい。

泣きながら、あたしと遊んでいたランのところに怒鳴り込んできた。汚いだの、私を裏で笑っていたんだろうだの、混乱する心のままに、ミミコがランを責め立てた。

あたしは、ミミコに最初で最後になるだろう感謝をした。

あんたはランのこころを裏切った。

自分の勝手な想像を、ランより信じた。
ありがとう。

第4話 トドメ

凶器のような言葉が、ランとミミコの幼馴染の絆を引きちぎっていきくのが見えるようだった。

いつもなら、決して言葉にされないだろう、鬱憤・不満の醜い言葉の嵐。

その激しさに、ランはただ立ち尽くしていた。

「あんた達！人に言えないようないやらしい事してるんでしょ。兄弟でスルなんて、あんた達は畜生だ。」

人間じゃない！！」

あたしがこの機会を逃がすはずもなく、ミミコが悪意に酔って言うてはならない一言をいった後、トドメを刺してやった。

「サンサさんの気持ちは理解できないけど、ランちゃんがそんな子じゃないってことくらい友達なら分かるわよ！

ミミコ、どっか行っちゃいなさい！汚いのはランちゃんじゃない、あなたよ！」

ランを抱きしめて、ミミコを嫌悪の目で見てやった。

ミミコはさすがに言い過ぎた自分に気づいたらしく、口元を押さえていた。

いまさら後悔しても、口から出てしまった言葉は戻らない。いつもの友情の死。

その最高の瞬間。

あたしは震えるランをミミコからかばって、叫んだ。

「私達の前から消えて！」

一生ね。

走り去るミミコの後姿を見送った。

バイバイ、ミミコ。

あと、邪魔なのは、サンサだ。ランを曲げてしまつ危険性をもつ男。気持ちを知られた今、兄には戻らないだろう。

これは、遠ざけている間にサンサに勝てる男を見繕みつくろうしかない。
あんな男でも、ランは兄だと思っているのだから、ミミコのように
はできないし。

サンサに勝つ男・・・難しい問題だけど、挑戦ちようせんは大好き。
きつと、見つけてやる。

第5話 後始末

サンサは思ったより簡単だった。

ランのおじさんに話を通して、メルリルに王都で食堂にぴったりの不動産を見繕ってもらっただけですんだ。

いかな天才も、恋に狂っている状態ではあたしの敵ではない。

結局、食堂ミント二号店を王都に出店。ランの両親がそっちへ移動した。

サンサは王都の大学へ進学することが決まり、先に寮に放り込まれた。

親に食わせてもらっている身として、断れなかったらしい。

ま、将来稼げる男になろうっていう気なんだろうけど、それまでにはランにぴったりの男を見つける予定だし、

無駄なあがきつてもんだ。

ミミコの抜けた穴は、あたしがしっかりふさいだ。

保護者として残っているおじは、両親との別居をさみしがらないよう食堂の手伝いなどさせて忙しくさせていた。

うっかり、サンサのいない物足りなさを感じさせるとやっかいなので、うちの兄たちを巻き込んでお泊り会やら、農園でのバイトを決行。すぐ、家の兄たちになついて、兄たちも妹が増えたと大満足だった。

ランは気づいていないけど、ミミコがうろつろしていた。ほんと、しつこいハエだ。

まだ、つるむ女子が見つかっていないせいだろう。

未練らしい女だ。

学校へ行くようになったら、あの女にも似合いのトモダチが出来るだろうが、それを待つのも面倒なので、

ミミコの忘れ物の手鏡をピカピカに磨いて宅配便で送り返した。

配達人は、三石クロンド。オーレス学校生で、新しい幕のためにバ

イト中のまあまあの男だ。

ミミコが見逃すはずはない。

ミミコは、なぜか親友に絶交されたと泣きついて、まんまとクロン
ドを手に入れた。

男って、女の嘘泣きに気づかない。なんだろう。

まあ、うるさいハエも駆除できたし、いいか。

第6話 私が手に入れたもの

ランという友達を得たことをメルリルに手紙で伝えた。いつか会いたい、ということだった。

すぐだと、「王妹と友人のあたし」に気後れを感じてランが退くかもしれない。

もっと仲良くなった後ならいいかもね。

オーレス学校の入学までに、仲が深まった。

周囲の人間の濃さすら、ランを変えない。

それが、あたしが惹かれる理由なのかも知れない。

ランの趣味を楽しむために、四歳まで使っていた箒を物置から引っぱり出した。

転移のできる使い魔を手に入れてから乗っていなかったので、修理が必要だった。

兄たちが選んだ箒で、ランによるとなかなかマニアックなモデルらしい。

第一本なのに、どの部分をいじるか・部品の調達・資金をどう稼ぐかなど話はつきない。

しまい込んでいた古い箒が、ランという新しい光に照らされて、貴重な子供時代の逸品いっぴんのように感じられた。

これこそ、あたしが友達に求めるものだ。

お返しに、カルア農園での新製品の開発にランを引き込んだ。

高級食材ゆえに、形の悪いもの、キズのあるものは流通させることが出来ない。

あたしは、それらを使ってなにか新しい商品を作りたかったのだ。甘い匂いを生かして、石鹼せっけんを作ったり、香りつき口ウソクを作ったり。

兄たちも手伝って、ワイワイガヤガヤ。

あたしが楽しんだように、ランも楽しんでいた。

成功より、失敗が多かったし、製品につながるようなものはまだだ
けど、いつか出来るだろう。

あたしはランの特訓により、また箒に乗れるようになった。

残念なことに、ランは食堂のバイト中に客の箒に触りまくったせい
でおじさんから箒禁止令が出ている。

二年になって箒通学が認められるまで、ツーリングはお預けになっ
たけど、色々調べるのがおもしろい。

どこへ行こうか？

あたしたちの望むまま、どこにでも行つてやる。

第7話 白馬の王子

使い魔召喚実習でナニモノかが、ランの召喚に応えて現れた。ただごとじゃない。

黒い巨体。ネモス先生がドラゴンだという。非常事態だ。

あたしは転移で食堂ミントに飛んでランのおじさんに情報を伝えると、次にメルリルの元へ飛んだ。

メルリルが指揮して国王軍の準備が進むなか、異世界生物学者が呼ばれた。

敵対するものなのかどうか。

遅まきながらオーレスから中継映像が届いた。

校舎上空から撮影しているらしく、人物の姿は小さい。

ドラゴンも人間サイズになっていて、なにやら手をさしだしている。ランとネモス先生は立っている。サッチは倒れていた。気絶しているのか、死んでいるのか。

二人が逃げないところを見ると、気絶しているのだろう。

教師のクセに足手まといになるなんて。死ねばいい。

撮影はずっと定位置から。ランたちの後方からなので、口元が読めない。

この撮影者^{アホ}には、罰^{ばつ}が必要だ。

横を見ると、メルリルがいつも持っている賞罰手帳^{じほうて}を開いている。

見開き一ページの真ん中に一本線。左端に賞、右端に罰。

ラン、ネモス先生は真ん中より、賞寄り。

オーレス軍、撮影者、サッチは、罰寄り。

あたしがするまでもないみたい。こいつは、痛い目に遭^あう。

映像を見る限り、攻撃はないようだ。

学者も、ドラゴンは知的生物だから平和的に交渉できるという。

撮影者に連絡して、一周の映像を撮らせた。
選りすぐりの軍人を並ばせ、転移の準備に入った。
ラン、必ず助けるよ。

第8話 所有権

結論から言うと、ドラゴンに害意はなかった。ただ、ランに対して下心があるっただけだった。

軍が動いた事もあって、世界中がドラゴンの来訪に釘付けで、メルリルはこれを政治にどう生かすか張り切っていた。

あたしはというと、ジャウラを陰から応援する気になっていた。

ずっと、ランにぴったりのサンサを超える男を捜していた。

ランを締め上げて吐かせた情報によると、認めてやってもいいと思えた。

女子の扱いがなってないのは、教育で何とかなる。要は、どんなに執着しているかだ。

血を乗り越えるサンサよりも、世界と種族を乗り越えるジャウラに軍配が上がった。

ジャウラには期待が持てたから『伝説作戦』中、時間をひねり出して、イイ男のいろはを叩き込んだ。

いまいちぎこちないけど、ジャウラに手にチュッとされて、ランは満更でもないようだ。

このまま、上手くやれば、ランはジャウラを受け入れるだろう。

ジャウラも、アドバイスしたあたしに借りが出来る。

これでいい。

ランに会った時から、「この子はあたしのものだ」って思っていた。恋とか愛とか好意とかいうものじゃなく、あたしがランに出会った瞬間から、ランはあたしの所有物だった。

メルリルは対等な友人関係だと思うのに、ランは違った。友人だけどあたしのもの。

その感覚は、今でもある。

ジャウラには、ランに触る許可を与えてやったのだ。

所有権は、あたしのまま。

あたしが、こんな風に思っているとは夢にも思っていないだろう。
これでいいのだ。

そのまま、あたしの手のひらにいねばいい。

第9話 国のメンツ

ランがド田舎に隠居するハメになったのは、政治のせいだ。

ランが見ていない、完成版の『ドラゴンと乙女』には、ある一文が加えられている。

「まだ誰も住んでいない」大地に、こちらの美しいものを送った。つまり、うちの国が大陸で最も古い王国だと主張する根拠になるように。

ドラゴンが移住させたところの美しいものたち」絵本が伝わっていたうちの国」うちの国が最も古いんだってことになるでしょ。

古いのは、各国の歴史書からいうと、うちの国カリランドルのどちらかで割れている。それに決着をつけたって訳。

もちろんリランドルが黙っているはずがない。パーティーでも一番しつこかった。

うっかり決着を覆す発言くつがえをされると困るので、きれいさっぱり表舞台から消されたのだ。

国のメンツの代金として、あの隠居支度金では少なすぎる。

国王だろうと、あたしのものを安く見るなんて冗談じゃない。

あたしが言うのが分かっていたらしく、メルリルからも「支度金」を出してきた。

メルリルに増額させた分は、ランのおじさんに渡した。うまく使うだろう。

最近、サンサがあたしの周りをうろついている。ランのことを聞きたいのだろう。

面倒なので、会ってない。兄たちがガードしてくれている。

あたしとしては、ビシッと引導を渡してやりたいところだけど、変態でも末は大臣になろうかという男だし、無理に恨みを買う必要はない。

ちょっと、おもしろいのが、サンサも伝説を信じていることだ。
で、乙女を殺した村娘はミミコに違いないつて思っている。

ミミコもそう思っているらしい。

笑える。

「あたしも、そう思う」って言いたくてもしょうがないけど、ミミコ
がコワれて騒ぎになったら、せつかくのショーにケチがつくからが
まんしてる。

メチャクチャ口^{くち}がむずむずするけどね。

第10話 為政者と商人

絵本『ドラゴンと乙女』・『続・ドラゴンと乙女』は売れに売れている。

続巻の方は、映像球付き豪華版の売れ行きが良かった。

まあ、女子の夢のような設定だから、売れるのは当たり前。

映像球には、ランがドラゴンを呼び出したシーンから、パーティ、海に消えるまでをロマンチックに演出して収めてある。

結局オーレスのシーンはランの顔が映っていないほうが良かったので、あの撮影者はメルリルの懲罰ちがいはつ まぬがを免れた。

あたしは許さなかったけど。

ばつちり調べて痛い目にあってもらった。

結局良い結果につながったとはいえ、あの時点での罪が軽くなると考えるほど、あたしは政治的じゃないからね。

売上金をどうするか、メルリルと彼女の財務担当者と話し合った。

ふつつ、絵本の著者には一割から三割の著作権料が支払われる。絵本の著者に一割。出演者の二人に一割ずつ。

ただ、事情を知らないランの両親が、娘のために代理請求訴訟を起こすと面倒なので「乙女の島にいるランに渡せない分」として二割渡して黙らせないといけない。

すると半分は関係者に支払う分として手をつけられない。印刷屋・製本屋・映像球屋に支払うと五分ほど残った。

100分の5とはいえ、小金だ。

ドラゴンと乙女はうちの国民じゃないから、税金を支払う必要がない。ということになっているので表立って徴収ちやうしゅうできない税金分として、これを充あてることにした。

このショーの興行主としての報酬ちやうじほうってことだ。

この中から、目立った功績のあったスタッフたちに功労金が支払われるだろう。

メルリルはアメとムチ派だ。

あの日、人ごみをウロウロしたスタッフのうち、いい情報を拾って来た者もいる。

反対に、酔っ払ってスパイに引っ掛けられた者もいるらしい。

幸い、危険な情報漏洩ろうえいはなかったらしいけど。

いくら優秀なスタッフでも、腕利きのスパイには食われてしまうこともある。

下手に隠し立てせずに、報告したので、手を打てたということだった。

あたしだったら、即刻クビだけど、メルリルは報告したことを評価して減点だけで済ませたらしい。

まあ、側近からの転落って言うのが一番堪こたえるだろう。

メルリルのこういうところが、為政者だなと思う。

商人には一度のチャンスしかない。

掴つかみそこねた者のことなど、知ったことが。

第11話 謎

あたしは、ひとつの謎を追っている。

なぜ、ランのおじ・ユーニスはあそこまでランに尽くすのか？

彼が隠密長をやめたのが、ランが七歳の頃。サンサは九歳で、男が精通によって色気づき始める頃だ。

調べるまでもなく、妄想相手はランだろう。

特に怪我もなく、突然の引退だったというから、サンサからランを守るため・・・という可能性がある。

ただ、燃え尽きただけかもしれないが、若く健康な男の離職理由としてどうだろうか。

今も、すべての事情を兄夫婦から隠して、ランとト田舎暮らしをしている。食堂も、付き合い始めた女も、後に残して。

迷いがあつたようには見えなかった。

「だったら、俺が保護者じゃ。兄貴たちには、風来に戻ると言っとく」

ユーニスは、ランの保護者として理想的な存在ではなかった。

彼が引き受けなければ、王家の世話した夫婦が仮親になっていただろう。

頭がいいんだから、自分が保護者になればランが見つかる可能性が高まるのも分かっていたはずだ。

それでも、強引に引き受けたのは何故だろう。自分の能力の方が、王家差し回しの者たちより優れているから？

それだけ？

あたしは四歳までオーレスにいたのに、ランに気づかなかったのはおかしい。というか、ありえない。

ランがオーレスに来たのがそれ以降だったら、あたしは王都にいた入れ違いだ。

普通の子は、四・五歳までの記憶が曖昧あいまいだというからラン自体、オ

ーレス生まれだと思い込んでいたとしたら？

書類上、ランはオーレス生まれになっていた。

あたしは、慎重に調べた。書類は、ユーニスが細工したとしても、人の記憶はあなどれない。

乙女フィーバーに乗っかって、ランの家の周りに住む三十代以上の住人の話を聞いた結果は、一家四人で引越してきたということだった。その後、ユーニスが加わった。どこから越してきたのか聞くと、王都からだという。怪しすぎ。本当はどこから越してきたのか追跡調査していると、メルリルから「待った」が掛かった。

その先を調べると、ユーニスの網あみに引つかかると言う。

隠すのなら、隠すだけの理由がある。

顔立ちから言って、近い血縁なのは間違いないと思う。

おじなのか、父なのか、兄なのか。

・・・あたしは、ランの父親がユーニスではないかと思っている。

これの裏づけを取るのには難しい。情報操作のプロ相手に、どこまでやれるか分からない。

でも、謎のままにする気はない。

継続調査中だ。

第12話 必要な距離

見合いの釣書が山になった。

ランとのツテをあたしに求めているんだろう。うざりたい。

王都でのらくらしていた両親まで戻ってきて、釣書を比べてあーだこーだ言っている。

帰ってこなくていいのに。

両親不在の間、カルア農園はあたしのものだった。

なのに子供だというだけで、支配権は両親に行った。

帳簿を見ることが、注文をチェックすることもできないなんて、あたしの才能の無駄遣いもいいところ。

二人を王都に戻すためなら、結婚できる。叶^{かな}うなら長生きしそうにない男がいい。

結婚して跡継ぎの子ができれば、すみやかに死んでくれるような先の短い男がいたら、即結婚するんだけど。

あたしは、未亡人になりたい。

でもそうそう、都合のいい男はいない。とりあえず、利害が合うのを仮の婚約者として契約しよう。婚約期間を長く取って、あたしが成人した^{あかつき}暁には農園の権利を奪ってやる。

あたしの経営によって、右肩上がりの成長が続けている農園を、ボンクラの手に置いておくつもりはない。

あたしは、サンサに手紙を書いた。

あたしと婚約してくださいと。

絶対、断らないと分かっていた。

サンサはすぐやってきた。

先は大臣かという男に、両親は狂喜乱舞して迎えている。両親へと残っていたわずかな想いさえ薄れた。

あたしを見れば、ただの契約婚約だと分かるだろうに、娘の幸せより、将来の期待できる婿がうれしいなんて。

両親にうんざりした。

はやく、あたしの目の前から消えて
でないと、壊してしまいたくなる。

第13話 起こらなかったこと

ミミコが来た。

あたしがサンサと婚約したのを聞きつけたらしい。

友達ヅラして、サンサが愛しているのは妹で、汚らしい男だと言う。

それくらい知ってる。

「サンサを支えられると思うの」

ミミコは絶句していた。ミミコにとって、愛とは求められることなんだろう。

サンサは両親を追っ払ってくれた。

あたしが耐えられなくなる前に、両親を説得して王都に帰してくれた。

何かをしてしまわずに済んだ事を感謝している。

それ以上、サンサに求めるものはない。

ボンクラが見ていたせいで、滞^{とど}った仕事を片付けるのは腹立たしいのとうれしいのとで混乱してしまう。

成長が落ち込んだのを怒る一方、両親の無能っぷりに笑いが止まらない。

農園はあたし^{エサ}のものだ。

すこしの情報^{エサ}で動く完璧な盾もある。成人を待つまでもないかも知れない。

メルリルとのやりとりで、彼女にも見合いの話が舞い込んできて、対応に苦慮しているという。

あちらは国益が関わるオオゴトだし、兼ね合いが難しいだろう。

ランからは、ド田舎の不便さも簿職人のマッコウがいることで帳消

しだという手紙が来た。

伝書鳩として契約した使い魔のナンゴーが、メルリルとランを定期的にまわって手紙を集めてくれている。

ランには、サンサ宛ての手紙を書いてもらわないと。

契約の対価を払うのに親友を使うのは嫌だけど、サンサにきれるカードがこれだけだったのだから仕方ない。

問題は、ランに上手く真実をはぐらかした手紙が書けるかということだ。

指導が必要かも知れない。

第14話 絶縁宣言

カルア農園をあたしのものにする決めた。

両親が、譲ってくれるのを待つなんて・・・あたしのガラじゃない。現在の所有者は両親だけど、元々は祖父母のものだった。

相続のとき、農園の権利の半分を両親が持ち、残りは孫たちで分けた。

祖父母は、完全に家族経営で行くつもりだったと思うけど、両親はあたしを王都の学校にやるのに裏金が要ったから、権利の20パーセントを売った。まず、これを買戻すのだ。70パーセントあれば、支配権を完全に奪える。

あたしがオーレスに戻っても、王都の華やかな暮らしに毒された両親は「農園の営業をしている」という理由で、王都をふらふらしている。付き合いの幅、流行を追う衣装類から考えても、農園からの利益だけでやっている訳がない。

きつと、すこしずつ権利を手放しているはずだ。

誰がそれらを持っているのか？

ある日突然家乗っ取られて、身ひとつで放り出されるのはゴメンだ。

兄たちのツテ、あたしのツテを頼りに、農園の権利がどうなっているか調べた。

結果は、恐ろしいものだった。

両親はすっかり資産を使い果たし、農園の権利を二重に売っていた。詐欺だ。

幸い、両親の持っている分だけだったとはいえ、上手いこと運ばれて賠償のために全部を奪われかねない。

奪うつもりだったのに、このままでは奪われてしまいそうだ。

あたしたちは個人的な物を、ありったけ売り払って現金を用意した。全部買い戻して書類を書き換えれば、両親の好きにはできなくなる。

それが、救いだ。

ランとツーリングするための筈ですら、金に替えさせる両親が憎い。

あたしたちは、農園を家族だと思っている。家族を売った二人は、もう家族じゃない。

二重売りの罪を明らかにするかどうかは切り札に取って置くとしても、何か痛い目にあってもらわなくては。

一応、兄たちに、何かするつもりだと言った。あんなアホでも、愛しているかもって思ったから。

兄たちは、私を支持してくれた。もう、縁切りだから好きにしささいだって。

おっとりした兄たちも今回の事で、堪忍袋の緒が切れたらしい。

了解はとった。さて、どうしようか。

第15話 差し押さえ

ふつうに農園の権利を買い戻すのでは、寄生虫を駆除くじょできない。

代理人を立ててミッツ商会というダミー会社を作り、そこに散らばった権利を買い集めさせた。

一般の人はあまり知らないだろうけど、カルアは精霊が宿る木だと言われている。

ただカルアの種を植えても、芽は出ない。カルアと通じ合える人がいて、ようやく発芽うねするのだ。

カルア農園は、畝うねの数でわかる。

まず一畝から始まり、農園が代替わりするとき、畑を一畝分耕す。

農園が次代の者の手に移ることを畑で宣言し、精霊が後継者を認めれば、次の朝には一畝分の新しい芽が生える。反対に、後継者が気に入らなければ、一畝分の木が枯れる。

何代目で畝の数がいくつかが、農園の成功の指標になるのだ。

祖父母から、ダンとトワイズに移ったとき、木が枯れた。これらのことを世間話に混ぜて、どんどん枯れて農園の価値がなくなる危険を匂わせると、カルア農園経営の難しさを知った権利者達と、適正価格で売買契約が成立した。

浮いた分は堅い投資にまわし、微々たるものだけど、確実な収入源を確保した。

次に裁判官を買収して（あとで、メルリルにちくつた）、農園の差し押さえ手続きをした。

ミッツ商会を通じて、農園の差し押さえを実行。

あつという間に、あたしたちは親の散財によって住む家を無くしたかわいそうな子供たちになった。

厳しい差し押さえで、バック一個分の私物以外は何も持ち出せなかったから、近所の農家の納屋の一角にお情けで置いてもらった。農園は、従業員が継続雇用されているので何とかなる。

あとはメルリルによって、ワイロ裁判官が弾劾^{だんがい}されるのを待つだけだ。

裁判官の仕事が検証されたら、あたしたちの元に農園が戻ってくる。対外的には半分だけど、実質的にはすべての権利があたしたちのものになるのだ。

その日まで日雇い仕事で食いつなぐ。

悪い噂ほどおいしく、すばやい。

我が子の財産まで食いつぶしたことは、すぐに知れ渡っただろう。上流でもっとも嫌われるのは破産だ。

あたしがダンとトワイヌに下した罰は、家族を捨てて選んだ世界からの絶縁。

今頃、ミッツ商会や、出入りの商人の差し押さえで身ひとつになっ
ているはず。

自業自得だ。

まかり間違えば、あたしたちも破産していた。

彼らは、自己責任で何とかすればいい。あたしたちには、もう関係のない人達だ。

第16話 拝金主義者

どん底生活で分かったのは、あたしたちの周りにいかに拝金主義者が多いかってことだ。

学校に通うことも出来ずに、小銭で配達の手伝いや農作業をしているあたしに向けられる目は

「親にすっからかんにされたバカな子。いい気味」だった。兄たちは、実際に言葉で馬鹿にされていたらしい。

周りにはかわいそうだと言いながら、橋本家の没落ぼつりくを喜んでいた。他人の不幸は蜜みつの味ってことだろう。

ここぞとばかりに、悪評を流す者もいた。誰が何を言ったか、忘れずにメモした。我が家の潜在的な敵対者をあぶりだす、いい機会になったとも言える。

一方では、食糧を分けてくれたり、納屋暮らしを心配して寝具を貸してくれたりする善人と、エセ善人もいた。

ホントに、勉強になった。

悪意より、勘違いした善意の方がたちが悪いって。

日雇いの稼ぎで食うのに精一杯だったから、王都での事態の進行を知ることは出来なかった。

吉報きうほうが訪れるのは今日だろうか、明日だろうか？ワイロ裁判官は弾劾がいされただろうか？

不安と期待で、精神的に疲れ始めた頃、ようやくメルリルから手紙が来た。

とうとうやり遂げのだ。

すべては、あたしたちの手に戻った。いや、それ以上かも。利益を吸う寄生虫がいないんだから。

代替わりを宣言した次の朝、芽生えた一畝ぶんのカルアを前に、あ

たしたちはありあわせの食べ物 みんなに振る舞い、お祝いパーティーをした。

今は評判が悪いし、今回の責任を取って王家御用達の看板は下げざるを得ないっていう、マイナス要因もあるけど、挽回ばんかいできるものだ。ミッツ商会から、権利を買い戻せば対外的にも農園は家族の手に戻る。

バンザイ！

第17話 これを親と呼べるのか

産んでもらった恩って、いくらだろう？

二人に対する借りって言ったら、産んでもらった事ぐらいしか思いつかない。

何しろあたしには、ダンとトワイスに育ててもらった記憶がない。物心付いた頃には兄たちが順番で世話してくれていたし、4歳からは学校の寮で、二人に会いに行ったことはあっても、会いに来てくれたことは一度もない。

まだ学生だった兄たちに農園を押し付けて、王都で遊び暮らして自分たちの財産どころか、子供たちの財産まで食いつぶした拳句権利あけくの二重売りの詐欺を働いた。

これで、親って言える？

親失格の二人だけど、完全に縁を切るには信じられない量の書類を調べて裁判所に提出して、面談を経て、結審を受けなくては認められない。

親権の失効を受けるまでには時間がかかるから、破産したダンとトワイスが金の無心に来たときには、親として扱わなくてはならない。あたしたちにあんな事したのは、親というだけで受け入れなくちゃならないなんて、間違ってる。

ただ、あたしたちにも弱みがある。

二人が身を持ち崩したそもその始まりは、あたしを裏口入学させるために農園の権利を売った事だ。

おかげで、メルリルと知り合えたし、王家御用達にもなれた。

田舎者が刺激的な都会暮らしに溺おぼれて金が尽つきた時、二度目だったから、残りの権利を売ることへの罪悪感のハードルが低かったんだろう。プラス要素とマイナス要素が交じり合っているから、そこを突かれると弱い。

けど、詐欺で牢獄ろうごく行きを救った今なら有利に交渉できる。

二人がきっぱり商売から手を引いて、死ぬまで田舎で暮らすというなら生活費を支給してもいい。

あたしたちを産み出してくれたことへの謝礼としてなら、我慢できる。

ミツツ商会への支払いを優先した上で、農園の収支からあたしたちの生活費を取ったら、たいして残らないけど、

あの二人には十分すぎるぐらいだ。

ことの顛末を恥じて消えてくれるのが一番うれしいけど、ありえないと思う。

きつと、現れるだろう。

何て言って出迎えてやろうか？

嫌味を言って、通じるくらい羞恥心が残っていればいいんだけど。

第18話 不自然な友人

あたしは甘かった。

ダンとトワイヌが戻ってくるなら、徒歩か商隊を乗り継いでだと思っていた。

実際は、友人の転移で贅沢な観光をしつつオーレスに接近中だということが、付き合いのある業者から分かった。

ミッツ商会に確認したけど、金目のものはみんな差し押さえたという。

なら、何が目的で「友人」とやらはあの二人に贅沢ぜいたくさせているんだろう。

再審によって、農園の権利は兄弟とミッツ商会が半分ずつ持っていることになったから、二人においしいところなどないのに。

ただ、敵が来るのを待つ訳にも行かず、情報収集した。

自由になる元手が足りず、表のものしか拾えなかった。

友人は、江南ケツト。46歳。妻と子供が二人。職業は、いまいち運営の下手な大地主。

二人と知り合ったのは、とある音楽会。顔見知りくらいの間柄。

それぐらいの仲で、上流で一番ホットな嫌われ者にサービスするなんて、おかしい。

さきに金を使わせて、あたしたちが断れないよう先手を打ったって感じがする。

金の無心より、ひどい交渉になりそうだ。

ケツトが何を求めているのかさえ手探りで、言質を与えないよう言葉を選びながら行くしかない。

今頃、何にも考えずに友人のもてなしを楽しんでいるのかと思うと・

・吐き気がする。

あの二人から産まれたなんて、記録からも記憶からも消してしまいたい。

今後の対策を練るために、家族会議を開いた。

兄たちも、ケットについては噂ぐらいに信憑性の不確かな情報しか知らなかった。

噂が真実なら、ケットには性格も性根も容姿も声も悪い未婚の娘が二人いる。

兄たちを婿^{むこ}として買う気かも知れない。

第19話 友人の誤算

ほこりをかぶっていた客棟を磨きたて、歓迎の晩餐会用のメニューを創作して敵の到着を待った。

普段の農作業に加えてこの準備で、あたしたちはボロボロだった。一段落したと思っていたのに、さらにあたしたちを窮地に追い込んだ、ダンとトワイスに対する慈悲が磨^すり減る。

生活費の支援など、してやるもんか。二人は働いて、糊口^{ここう}をしのげばいい。

とうとうやって来た一行の、特に二人の能天気な顔に許しがたいものを感じるけれど、笑顔で出迎えた。

二人は恥知らずにも、あたしたちが歓迎すると疑いもせず、「友人」にあたしたちを紹介した。

そしてケットは一步引いた所から、一家の再会を観察していた。

この人物から受ける印象からして、領地の経営が上手く行っていないのが不思議だ。

笑顔の下に、やり手の商人の顔を持っている。今も、誰がどんな反応を示したかチェックしているようだった。

挨拶^{あいさつ}をそこそこに、ケットを客棟に案内して敵を分断した。

文句のつけようがないお客振りで、さりげなく土産を渡し、勧められるまま客棟に納まった。

ケットが何を求めているのか二人に誘導尋問をかけたけど、収穫はなし。能無しが。

相手の出方を待ちつつ、歓迎の晩餐に移った。

ケットに下心があるのを事前に知らなければ、本当にいい人だと思っただかもしれない。

魅力的で話術に長けていて、二人の娘たちのことも織り込みながら

領地経営について、いつのまにか話が弾んでいた。でも、さりげなくはさまれる質問でケットの狙いが分かった。予想通り、兄たちだ。しかも、今回のごたごたの裏側まで知った上で、その手腕を評価したのために白羽の矢がたっらしい。

娘たちの采配さいはいで領地経営がイマイチなので、出来のいい婿むこを欲しがっているのだ。

正直、裏まで知られているとは思わなかった。

油断のならない交渉相手は愛想のいい顔で、誰が一件の指揮を執ったのかを掴もうとしていて・・・多分掴んだのだろう。一瞬、残念そうな顔をしたが、すぐ魅力的なお客の仮面をつけた。

兄たちは婿候補から外れた。

ケットは「友人」に無駄な出費をしたのを悔やんでいるだろう。

第20話 手打ち

転んでもただでは起きないのが商売人の掟。おきて

婿を諦めたケツトは、娘を修行させて欲しいと言い出した。

授業料も、能天気夫婦に掛かった費用を差し引いているなら妥当なところだ。

能無しのお嬢様を預かって商売を叩き込むなら同じような大地主のほうがいいのに、あたしに頼むって言うことは、娘の程度が知れる。

苦労しそうだ。

借金返済のために、兄弟を売らずに済んだのだから、良しとしよう。

「もちろん、引き受けさせていただきます。それなら、すぐ領地にお戻りください。きつと、お嬢様方が助けを

求めていらつしゃいます」

につこり。わざとらしく微笑んだ。

どこの家にも触れて欲しくない恥部がある。ちぶ わざわざそれを交渉のカードにしたからには、ただでは置けない。

上手く行っていない事業を、ミツツ商会を使って追い込んでいるところだ。

会社の1つや2つ、懐は痛まないだろうけど、メンツは痛む。

今頃、お嬢様たちは半狂乱だろう。

我が家の屈辱を晴らすためにいろいろ仕掛けた。

まだ芽を出していない物もあるけど、お嬢様の仕込みはあたしにも利益のある契約だから、このへんが潮時。しおとき

手打ちの指示をメモして、ナンゴーに託す。たく

「ははは、しっかりしたお嬢さんだ。うちの娘をよろしく頼むよ」
やっぱり、いい商売人だ。引退したのにうるさく首をつっこむなん

て真似はしないらしい。

「ええ、お一人は仕込みとしてお預かりします。もうお一人は農作業員として。どちらをどれに着けるかは、

お父上にお任せいたします」

まだ見ぬお嬢様方、覚悟してね。

兄弟でも、トップに立てるのは一人。

商売は、ママゴトじゃないんだから。

「お嬢様方のおいでを、楽しみにお待ちしておりますね」

第21話 ホクロ姉妹

能無し夫婦には、海辺の古屋を買い与えた。

今後のことも考えて、一帯に「子供たちを食い物にしたうえ破産して、都落ちしてきた夫婦」で、

「そんな親でも、子供たちがなけなしの金を出し合って、親に家を買ってやった」という事実を流布^{るふ}させた。

二度と金を借りられないように手を打って、当座に必要なものと、釣り船と釣具を持たせて縁を切った。

時々、死んでないか確かめるだけの間柄だ。

これらの支度^{したく}をするだけでミツツ商会に避難^{ひなん}しておいた金も尽きてしまったから、金なる木である

ケットの娘たちは大歓迎だ。

予想通りのワガママ娘で、転移してきた瞬間から文句の言いっぱなし。

ケットが、あたしに預けたのも納得だ。

二人は双子で、姉の目元のホクロさえなければ見分けがつかない。

兄たちも、区別がつかないらしい。

それを利用して、いたずらの限りを尽くしてきたって感じた。

あたしの目から見て、ホクロは、付けボクロだ。

わざと目立つ位置（目元・口元）につけて、付けているほうが「姉」としている。

男には通じて、過去にメルリルとその手の化粧術を駆使^{くし}して遊んだあたしの目は誤魔化されない。

どうせ、「一日ごとに交代しよう」とか取り決めをしているだろう。ただの農作業員と経営者では、労働時間、労働内容、食事、休憩時間・・・ありとあらゆるものが、違う。

そんな甘い取り決めが、いつまでもつか楽しみだ。

きつい農作業を当てられた妹が、ずっと「姉」として経営を学びた

いと、姉を羨ま^{やう}ない訳がない。

家政の者が呼びに来たので行くと、引つかいたり張り倒したり、お互いの髪を引き抜かんばかりの大喧嘩^{おおげんか}だった。

一週間はもつだろうと思っていたら、五日目にはこの騒^{さわ}ぎ。根性なさすぎ。

よく見れば、どちらの目元にもホクロがある。

ギヤーギヤー怒鳴りあつて、「私が姉よ」と見苦しいつたらない。あたしは親には恵まれなかったけど、兄弟には恵まれている。ケットの娘たちを見ていて、そのありがたさを噛^かみ締めた。

第22話 主人と使用人

二人の「姉」事件と、教育の進捗状況しんちよくとをまとめて、ケットに送った。

今度のことで、ケットの密かな目論見もくろみもつぶれた。

仕込み中に、兄弟の誰かとイイ仲になってくれれば儲けもつものと思っ
ていただろうけど、

農作業をしたくなくて大喧嘩おおげんかするような女は、兄たちの対象外だ。
うちとしてもケットとの提携はおいしいけど、カルアの木に嫌われ
るような身内はコリゴリ。

金がどうしても必要でなければ、関わりになりたくない姉妹だ。

どちらも「姉」だと言って譲らないので、今までに気づいた事を拳
げさせた。

五日間、不平不満をたれるだけだったのなら見込みなしで、送り返
すつもりだった。

気候の違い、食事の内容、何でもいいと言うと、お互いの言葉も聞
かずにまくし立てる始末。

この動物を、商売人に仕込まなくてはならないのかと思うと、ため
息がこぼれた。

授業料を上げてもらわなくては、割りに合わない。

意見だけでなく推測を付け加えたましな方を「姉」とした。

農作業にまわされたくないのか、出来ないなりに意欲を見せている。
今は観察眼を養うために、声を出すのを禁止している。

くだらない事をしゃべるのは簡単でも、記録に残すのは難しい。

初日は10枚以上あった意味のない提出紙も、今では半分は内容が
ある。

姉はカメ並みにノロイが、進歩はしている。

妹が、兄たちとお茶にしようとして歩いてきたあたしに突っかかってきた。

「日焼けしてしまったじゃないの！」

だから？

使用人見習いの身で、主人の個人住居に乗り込んできた理由が「日焼け」だと。

カルアの木に何かあったのなら、この逸脱も許したんだだけどねえ。^{いっただ}

あたしは家政の者に、農園から叩き出すように指示した。

これで自分の立場が理解できるだろう。

第23話 主人と脱走娘

叩き出した妹は、ツテを頼って父親の元に帰ろうとした。

ケツトは娘をうちの農園に送るようにその商人に頼んだらしく、ただ今その商人を案内してまわっている。

迷惑料としては十分だ。

うちの販路の弱い地方への商隊長なので、契約が整えば儲け物だし、破談しても顔つなぎとしての成果は残る。

脱走娘は、農作業に戻した。

自分がしたことがどういふことなのか理解しているのかどうかは知らない。

ただ、主人の権力というものを知っただろう。

あたしに付いてまわっていた姉は、妹がしたことの意味も考えずに「しゃべった」ので提出紙とペンを取り上げた。

書いてみれば妹のしたことに気づけたかも知れないのに、情に流されて言いつけに逆らった。

書かないなら、紙もペンもいらぬ。

妹が脱走中の二日間、しゃべることも書くことも禁じられた姉は、机の隅に置かれたそれらに飢えて^ういるだろうに、視線を意識して外そうとしている。なかなか精神力が鍛え^{きた}られてきたみたいだ。

脱走娘が帰ってきたことだし、解禁してもいいかな。

あたしは、姉に紙とペンを渡し、主人と使用人の正しい距離についての考察をするように宿題を出した。

姉は、飛びつきたいのを抑えて紙とペンを受け取る。

うん。だいぶん内心が顔に出なくなってきた。

どんな状況でも、商売人は付け入る隙^{すき}を与えないように平静を崩してはならない。

妹は姉が楽をしているとふくれているけど、本当のところは逆だ。姉は、勝手気ままに迷惑をかける妹の分まで責任を背負わされて、

主人の苦勞をしている。

使用人のヘマは、主人の落ち度になる。

今回のことで、ヘマをしないように育てることが、主人の役目だということが分かっただろう。

第24話 あたしの契約

時間が出来たので畝を見回っていると、脱走娘が立ちふさがった。あたしの後ろで、姉が息を飲む。

「なぜ、私だけ食事がまずしいの？ 脱走したからいじわるだなんて、子供っぽいんじゃない？」

あらら、そんな風に思っていたなんて・・・こいつホントにアホだ。ついてくる様に言つて、一本のカルアの木を目指した。

畝の端、あきらかに生育の悪いものがある。

辺りの木に比べ、実はふた周りも小さく香りも薄い。葉の色も浅く、少ない。

姉は気づいたようだ。あたしに、顔向けできないとばかりにうつむいた。

「あんたが世話した木よ。他と比べて収量も少ないし、収穫物の商品価値はゼロ。普通だったら叩きだすところだけど、一応預かっているからそうもいかない。損失分を埋めるために、あんたたち二人の食事代や給金から差し引いたけど、

それでも足りない。足が出た分は、授業料の請求書に付け加えておいたわ」

姉が、パツと顔を上げた。あるときから急に生活が貧しくなった理由を自分なりに考えていたのだろう。

聞いて、納得したようだ。父親にまでツケが及んでいることが心苦しいのか、唇を噛んでいる。

人目がある場所なのに内心が表情に出すぎだ。後で注意することと、頭の中にメモを取る。

先に、アホのしつけがある。

「あんたはすぐ人のせいにするけど、自分のしたことをご覧。」

父親の親心も知らず好き勝手して恥をかいだ上に、商売相手に貸しまで作った。

あんたに目がついていたら、あの商隊が出発直前だって分かっただろうに。

足止めされた二日分の経費がいくら知ってる？

もちろんケット氏に請求なんかしない。ただ、「貸し」になるの。この貸しっていうのはやつかいでね。ここぞという切り札として使われるから、ケット氏は大変な重荷を負ったってこと。

商隊の者達も大変。遅れた日程を取り戻そうと思えば夜営なしで駆けっぱなしでしょう。

屈強な者でもきついし、夜は盗賊に襲われる可能性も上がる。

ケガですめばマシだけど、死んだら？ よい働き手を亡くしたら、商隊の危機よ。

夜営中に荷崩れを直すことも出来ないから、商品の破損・汚損も考えられる。

荷を奪われずにすんだとして、それでも予定に間に合わなかったら、遅延金を取引先に支払うことになるわね。

彼らが来るのに合わせているんだから、一日でも遅れたらご破算のこともあるし。

これって、ちょっと考えれば想像できることよね？

あんたが考えなしだったせいで、周りがあんたのツケを払っている。あたしは先だったの事があって、面倒を起こす肉親が大嫌いなもの。

どんなものでも食事があるのはあたしの慈悲よ。ありがたく思いなさい」

あんたには残飯でも不相応だけど、あたしは使用人に、最低限の生活を保障をしているのだから仕方ない。

本心を言えば、ブタ小屋に住まわせてブタと同じものを食わせてやりたいんだけど。

第25話 未来視

思いがけない客だった。

事情を聞いて、納得だけど。

相変わず、ランは台風の目だ。嵐の真ん中でキョトンとしている顔が想像できて笑ってしまった。

彼はシャルナードというドラゴンで、ランの隣人になるために人間としてのイロハを教えて欲しいと言う。

生徒が三人になったなと思っていたら、二人減った。

ドラゴンの言うことには、ケットの姉妹の「色の黒い方の寿命が尽きている」らしい。

いつその日が来てもおかしくない状態だと言うから、手紙をつけて父親の元に姉妹を送り返した。

その日が来て、しばらくしてまた仕込みを受けたいと言うなら受け入れるけど、ケットはたった一人の跡継ぎを外に出すことはないだろうし、仕込みはここまでだ。いい臨時収入だったけど、仕方ない金なる木を失ったけど、ドラゴンにものを教えるというのは、それ以上にやりがいのある仕事だ。

上手く行けば、未来を見るドラゴンに「先生」としてつながりを持つことが出来る。

無給でも、投資としては最上ランクの仕事になるだろう。

ジャウラに教えたように、表情の使い方、しゃべり方、ボディランゲージ等を教えた。

授業の後ドラゴンは睡眠もとらずに図書室の本を読み漁り、知識を増やしていった。その穴を埋めていきながら、能力を有効利用して移住資金を貯めた。

なにをするにも金が必要だ。

顔を変えて未来視の占い師として、荒稼ぎ。

手紙を見て怒鳴り込んできたケットから始まって、王族のメルリルまで。

あたらしいもの
新物好き富裕層からたっぷりいただいたので、資金は万端。メルリルから戸籍も手に入れた。

メルリルが何を聞いたのかちよつと気になるけど、あたしも秘密にしてるからオアイコだ。

そのうち、「選択」がすぎたら教えてくれるだろう。

着々と進む移住準備の間に、うちには芸術品の山が出来た。

変わり者の彫刻家として移住するために始めた彫刻だけど、あつと言う間に芸術品のレベルに達した。

練習台となったうちは、ありとあらゆる場所に彫刻が施されている。不動産価値が上がったし、商売のはつたりにもいい。掃除が大変だけど。

これらは授業料として好きにしていいたいと言うから、ちよつどあった芸術展に出品した。

狙い通り最優秀賞を獲得して商品価値をつけ、ミッツ商会の独占販売ということで値をつり上げた。

新進気鋭の彫刻家をミッツ商会に紹介した功績で、独占契約料の2パーセントを受け取れるようになったので、農園の権利の買戻しも進んだ。

無給だと思っていたのに、たいした利益だ。

ミッツ商会も潤っている。

ランの鼻歌に感謝だ。

最終話 あたしが望むもの

あたしがドラゴンに聞いたのは、「いつか、あたしの夢が叶うか」だった。

あたしの生きている間じゃなくてもいい。

いつか、カルアが一般家庭で食べられるぐらい安価になればいいと願っている。

精霊が気に入るような人々が増えれば、世界は平和なはず。

戦争で儲ける商人が多いせいで火種は火事になるけど、長い目で見れば文化も技能を持つ人も失われてしまう。

人が少なくなれば、商品の質も悪くなる。

いいことなしだ。

かと言って、人が増えすぎても良くない。

自然と人工のバランスが取れているのが理想だ。

頑張っているメルリルには悪いけど、国なんか百害あって一利なしだ。

どんなにいい治世の王も公正な裁判官も、百年生きられない。次代が優秀である保証なんてない。

だから、この世界を愛して守ってくれるドラゴンが欲しい。

彼らに、この世界の王や裁判官になって欲しいのだ。あたしは、何千年もひとつの方針が守られ続ければ、

戦争という概念自体が無くなってしまふんじゃないかと考えている。そんな世界なら、カルアが庶民の食卓に登るに違いない。

ぜひともランに人間の上位種として、この世界生まれのドラゴンを産んで欲しい。

親友の地位を利用してても、必ずジャウラに本懐を遂げてもらうつもりだ。

それであたしの「いつか」が来る。

ドラゴンが視た未来を引き寄せるためにも、ランに教育を施さなくてはならない。

子は親の背を見て育つって言うじゃない？

ましてや、小さな頃に亡くなった母の願いだったらどう？

ここばかりはドラゴンに比べて短い一生なのが効いてくる。

ジャウラが禁止しているせいで、直接ロムに転移することが出来ないから、頼みの綱は手紙だ。

いかに政治的な部分を避けながら、矛盾と不正に対する義憤を育てられるか。

国というものの害を、世界を区切らない未来にどう繋げていこうか。

あたしの望みって小さいけど、世界を変えなきゃ叶わない。

だったら世界に変わってもらうまで。

あたしの腕の見せ所だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0722g/>

黒チル日記

2010年10月11日21時09分発行